



ブラティスラヴァ世界絵本原画展

～広がる絵本世界

Topics

特集：ブラティスラヴァ世界絵本原画展
画人たちと千葉

連載：ボランティア日和／展示室で考える

絵本の楽しみ

おそらくはどなたにも、幼い頃に母親や姉などから絵本を読み聞かせられた楽しい思い出があることでしょう。

晩ご飯の後、寝床に入って絵本を広げていると、だいにまぶたが重くなり、絵から目を離して耳だけを働かせている内に、読んでくれている母の声も遠のいていって、いつの間にか夢の世界の場面へと切り替わってしまう。そうしたなつかしい経験は、ふとんや蚊帳の湿ったにおいまでも一緒によみがえらせて、あまづっぱい感傷にもひたરાされてしまいます。私が後年、絵や美術が好きになった原点は、ひょっとするとそんなところまで遠くさかのぼるのかも知れません。

そもそも日本人は昔から、物語を絵とともに楽しむことがとても好きで、上手でした。平安時代に竹取物語や源氏物語などの物語が生まれると、それらの多くは、文章だけではなく話の一部を形に表した絵とともに鑑賞されたのでした。今も残る12世紀初頭の「源氏物語絵巻」の一段(「東屋一」)には、侍女に文章を読んでもらいながら絵の冊子を眺めている姫君の姿が描かれています。そこに描かれているのは、絵と文章がそれぞれ1冊ずつの本に分かれた体裁のものですが、横に長い巻物に文と絵が交互に続く形式、いわゆる絵巻物がより一般的になって、鎌倉時代、室町時代の中世にまで続いていきます。

今のように庶民に至るまで広く絵入りの本が楽しめるようになるのは、日本では17世紀以降、江戸時代に入ってからのことです。江戸時代には木版による印刷物の出版が現在想像する以上に盛んとなり、安くて良質な絵本、絵入り本が誰にも享受できるようになったのでした。そしてまた、本の形式を取らず、一枚の版画によって物語の一場面をじっくりと鑑賞することも喜ばれました。錦絵など浮世絵版画の普及は、人々のそうした絵を読む楽しみにも支えられていたのです。

近代以前の日本の絵巻物や絵本の長い伝統は、現代にも立派に引き継がれています。新聞や週刊誌の連載小説にはほとんど挿絵が入っていますし、週刊、月刊の漫画雑誌が数多く刊行され、子供ばかりでなく大学生やサラリーマンにまで歓迎されていることが、何よりの証拠です。日本人はまことに絵好きの人種なのです。

ところで、今現在の幼児や少年少女は、どれほど紙媒体の絵に親んでいるのでしょうか。テレビやテレビゲームに任せきってしまっていて、親などの年上の家族が子供たちと一緒に絵本を楽しむ機会を放棄しがちになってはいないでしょうか。



イソラ・ミセンタ「チクタク」より 2002年 ©Isola MISENTA

少し以前のことで、皇太子殿下と妃殿下が愛子様とご一緒に絵本を囲んでひとときを過ごされている、いかにもなごやかな情景がテレビで紹介されたことがありました。愛子様のお年ではまだ字が読めないはずですが、絵本のページを繰りながら盛んにひとり話をされていました。おそらくは、何度も何度もご両親にせがんで読んでいただいた話の内容をすっかりそらんじてしまっておられ、絵本の世界に没入することの可能な、お幸せなご様子をうかがうことができたのでした。

子供はフィクションの中に無心で入っていける才能と特権とを持っています。大人はそうした子供たちの能力を引き出し、伸ばしてあげるためにも、早い頃から一緒に絵本の楽しみを教える必要があるでしょう。もちろん良質なお話と美しい絵の絵本を選ぶという、大人の側の責任も問われることでしょう。

当館では夏休み期間を中心にこの夏、「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」を開催します。ブラティスラヴァとはスロヴァキア共和国の首都ですが、ここで2年に一度、国際絵本原画展が開催されています。世界的に評価の高いこの絵本展の第19回展(2003年秋開催)出品作から、受賞作品と日本人作家の作品を中心に紹介しようとするものです。今日の絵本とその原画の最高水準が一望のもとにご覧になれる絶好の機会です。子供たちとご一緒にご家族お揃いで是非ご来場下さいませよう、館員一同とともに心からお待ち申し上げております。

館長 小林 忠



田島征三「オオカミのともたち」より 2001年 ©田島征三

ブラティスラヴァ世界絵本原画展 ~広がる絵本世界

絵本は、小さな子どもやその家庭だけでなく、昔子どもだった大人にとっても、親しみ深いものです。流行歌や熱中したテレビ番組から年齢がバレたという話はよく聞きますが、絵本に関して言えば、それはあまり当てにならないのではないのでしょうか。優れた絵本が、何年何十年にも渡って多くの子どもたちに愛され、書店の一角に不動の席を確保し続けてきた姿を見かけると、やはりかつての子どもである私もまた、うれしくなってしまう。

ロングセラーがある一方で、今日もまた魅力的な絵本が生まれ続けています。ブラティスラヴァ世界絵本原画展には、原画の出品にあたり、「すでに絵本として出版されていること」という条件があります(その他に、近作が対象となります)。そして、原画作品はその絵本とともに審査されます。世界中から作品が届けられるこのビエンナーレ(隔年開催の展覧会)は、原画展のための原画制作ではなく、あくまでも、絵本文化そのものの発展のために実施されているのです。

最近、各地の美術館で、絵本原画の展覧会を目にすることが多くなりました。また、絵本を専門に扱う美術館も、この10年あまりの間に次々とオープンしています。日本で有名な絵本原画展といえば、やはり「ポロニヤ国際絵本原画展」でしょうか。隔年ではなく毎年開催され、30年近く前から日本でも紹介されてきたこの国際展は、ブラティスラヴァ世界絵本原画展と同じ、1967年に始まりました。出品は公募制で、プロの発表の場だけでなく、絵本作家を目指す若い人々の登竜門になっています。一方、ブラティスラヴァ世界絵本原画展は、各国に設けられた選考委員会の審査を経て代表が送られます。世界で最大規模の絵本原画展として1967年に第1回展が開催されて以来、2年ごと(奇数年)に開かれてきました。第19回展には、38カ国から311人のイラストレーターが参加し、実に2,398点の作品が集まりました。第1回から通算すると、約100カ国から5,382人の原画作品44,714点が集まったこととなります。今回グランプリを受賞したのは、出久根育さんの「あめふらし」です。日本人のグランプリ受賞は、第1回展の瀬川康男さん(「ふしぎなたけのこ」)、第17回展の中辻悦子さん(「よるのようちえん」)に続く3人目。グリム童話のお話が、独特の世界観で表現されています。



ブラティスラヴァでの会場入口

ブラティスラヴァ、という都市の名前は、あまり耳慣れないものかもしれませんが、1993年にチェコとの連邦国家を平和的に解消した後、ブラティスラヴァはスロヴァキア共和国の首都となりました。日本との関係でいえば、2002年に在スロヴァキア大使館が開設され、ビザなしでの旅行が可能となり、今後ますますの交流が期待されているところです。さて、日本からは直行便がないため、隣国オーストリアのウィーンに入り、そこから車で1時間ほど行くと、国境の向こうに、テーブルをひっくり返したような姿で親しまれているブラティスラヴァ城が見えてきます。中世の面影を残すおだやかな街は、絵本原画展が近づくと、ショーウィンドウに展覧会や関連イベントの開催を告げるポスターが貼られ、楽しい雰囲気がつくれます。文化会館で開かれる原画展だけでなく、国際シンポジウムやユネスコとの共催ワークショップなど、会期中、絵本をめぐる様々な催しが用意されているのです。

旧東ヨーロッパの国々からは、優れたイラストレーターが多数生み出されてきました。必ずしも自由な社会ではなかったかもしれませんが、その状況が逆に、絵本という控えめな分野を作家たちに許された創造と挑戦の舞台にしました。ブラティスラヴァ世界絵本原画展が、東西冷戦下において子どもの本の国際交流に果たした役割は大きいといわれています。同時に、スロヴァキアのイラストレーターたちにとっては、国外の作家たちと競い合う貴重な機会でもありました。

今回の展覧会では、「グランプリ」(1名)「金のりんご賞」(5名)「金牌」(5名)それぞれの受賞作品に続いて、日本を代表してブラティスラヴァに送られた19人のイラストレーターの作品をご覧ください。日本のイラストレーターの活躍は、国際的にめざましいものといえます。さらに展示の後半では、40年近い歴史を振り返り、過去の受賞者の中から絵本分野にとどまらないユニークな活動を、代表的な原画作品とあわせて紹介します。

絵本原画には、じつに様々な工夫がこらされています。展示の前半(受賞作品と日本からの出品作品)と後半をつなぐものとして、「絵本原画の素材と技法」をテーマに、面白い素材や手法でつくられた作品をご紹介します。原画には「つくる」という言葉がまさにふさわしいように、本として完成した姿を思い



ブラティスラヴァ 市内の様子



ブラティスラヴァでの展示風景(日本コーナー)

ブラティスラヴァ世界絵本原画展 ～ 広がる絵本世界

2005年(平成17)7月9日(土) - 2005年(平成17)8月28日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】毎週月曜日

* 7月18日(月・祝)は開館、7月19日(火)休館

【入館料】一 般 800(640)円

高・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

ブラティスラヴァ世界絵本原画展 関連イベント

糸あやつり人形とおはなしによる『赤ずきん』

人形とおはなし：アセファル／結城一系 他

日 時：7月30日(土) 午後2時～3時(開場は午後1時半)

会 場：美術館1階さや堂ホール

定 員：150人、無料(高校生以上は本展覧会チケットの半券が必要／未就学児は保護者の同伴が必要)

おなじみの「赤ずきんちゃん」が、江戸時代から続く日本の伝統的な糸あやつり人形となって登場し、物語の世界へ誘います。人形は絵本作家飯野和好氏のデザインによるものです。原画(本展覧会に出品)とともに楽しみ下さい。

* 参加ご希望の方は、往復葉書に住所・氏名・電話番号・年齢・希望人数(1枚につき4人まで)を明記し、千葉市美術館「赤ずきん係」までお申し込みください。7月11日(月)必着。(希望者多数の場合は抽選)

「絵本を楽しむひととき」

日 時：7月21日(木)、8月2日(火)、4(木)、18(木)、23(火)、

午前11時～(20分程度)

会 場：7階展示室ロビー、無料

当館ボランティアが、今回原画が出品されている絵本を実際に読みながら、えとことばでつくられた絵本の楽しさを紹介します。おもに小学生を対象とします。

描きながら、あらゆる素材や技法が用いられ、つくりこまれています。絵本原画のおもてには、あくなき実験の痕と読者の心をくすぐるための無数のたくらみが刻まれているといえるでしょう。絵本づくりの世界には、絵本だけを手がけている人たちの他に、様々な背景をもつ人が作家として加わっています。油彩、水彩、版画はもとより、広告・商業美術やアニメーションの世界からも、驚くべき原画が寄せられています。このことは、絵本づくりが自由と可能性に満ちた分野であることを示しているといえるでしょう。

絵本と絵本原画には、それぞれの楽しみ方があると思います。手に取ってページをめくり、絵と言葉で語られる物語を楽しむ絵本と、印刷された紙面からは想像のおよばない立体感とインパクト(鮮やかな色彩、生き生きとした筆や手のあとがもたらすもの)が直に感じられる原画は、全く別の楽しみを私たちに与えてくれます。両者を見比べてみるのもおもしろいですが、原画は原画そのものとして、豊かな表現世界をお楽しみいただけると思います。

ところで、絵本原画展に興味をもってくださるのは、どのような方々でしょうか。今まさに絵本とともに日々暮らしている小さな子どもたちや、そのお母さん、お父さんだけでなく、書店をのぞいては、自分のためにとっておきの一冊を選ぶ大人の読者たちにも、きっと楽しんでいただけたと思います。また、イラストレーターやグラフィックデザイナーを目指す若い人たちにとっても、たいへん刺激的な機会ではないでしょうか。会場では、原画とあわせて、それぞれの絵本も手に取ってご覧いただけます。小さな絵本の限りなく豊かな世界が、みなさまをお待ちしております。

学芸員 山根佳奈

「なが～いもの、な～んだ？」

日 時：8月6日(土) 午後2時～4時(受付開始は午後1時半)

会 場：美術館11階講堂他

* 集合(受付)は、美術館1階さや堂ホール

定 員：20組、無料(保護者の方が展示をご覧になる場合はチケットが必要)

小学校低学年の児童とその保護者を対象とした、作品鑑賞と制作のプログラム。今回は、仕掛け絵本のしくみをつかった工作をします。はさみとクレヨンまたは色えんぴつのセットをご持参下さい。

* 参加ご希望の方は、往復葉書に住所・氏名・電話番号・年齢(子どものみ)を明記し、千葉市美術館「なが～いもの、な～んだ?係」までお申し込み下さい。7月18日(月)必着。(希望者多数の場合は抽選)



飯野和好「赤ずきん」より 2001年 ©飯野和好

市民美術講座のお知らせ

千葉市がいままで収集した美術品は、企画展や所蔵作品展でテーマを決めて公開していますが、収集された美術品が美術史の中でどのように位置づけられるのを知りたいという声が多く寄せられております。そこで、昨年度より千葉市美術館のコレクションを理解していただくための市民美術講座を開催しております。2005年度は、20世紀後半の美術を中心に講座を行います。

第2回 7月23日(土)

「ナショナルな性格をめぐって - 1940年代～50年代 - 」

講師：藁科英也(本館学芸員)

第3回 8月27日(土)

「『こうなったらやけくそだ!』 - 「反芸術」の1960年代 - 」

講師：水沼啓和(本館学芸員)

第4回 9月25日(日)

「概念と物質 - 1960年代末～70年代初めの動向 - 」

講師：松本 透(東京国立近代美術館企画課長)

ボランティア日和 episode 7

坂本さんは、外資系銀行での勤務経験を生かし、千葉市美術館や千葉市郷土館を含む様々な場で、国際交流のための地道な活動を続けてこられた方です。

- 日本の美術館や博物館は世界トップクラスの外交官であり、教育機関であり、産業研究機関である -

バブル崩壊後、日本中の美術館が入館者数減少傾向に頭を痛めている事と想像する。例えば入館者数がゼロであろうとも、作品や美術館や博物館の価値が下がった訳では決してない。価値あるものを十分に活用できない国際交流センター他、行政や企業経営者の認識能力に問題があると私は強く感じている。

小学生や中学生にギャラリー・トークする機会を千葉市美術館より頂き、私自身大きな勉強ができた。子供達の学力低下に関する記事を新聞で読んだが、子供達の美術品を鑑賞する真剣なまなざしを見て、それは違うと思った。

その昔、千利休は利休百首に「其の道に入らんと思ふ心こそ我身ながらの師匠なりけれ」「習いつつ見てこそ習へ習はずに善悪いふは愚なりけり」「志深き人にはいくたびもあはれみ深く奥ぞ教ふる」「恥を捨て人に物とい習うべし是ぞ上手の基なりける」と詠った。私達の人生には限りがある。しかし芸術や学問は無限の奥深さを持つ。子供達にこの無限の奥深さを伝え、子供達が恥を恐れず自由に質問できる雰囲気作りをしていく事も私達ボランティアの義務と感じた。

自然が違うと人の感性も違ってくる。外資系銀行は日本の銀行と違い、不動産だけでなく、美術品担保の貸付けがある。評論家や報道に惑わされる事なく、百年後も変わらぬ価値で査定してくる。厳しかった。そんな中、私は日本人の色彩感覚は外国人よりも優れていると思った。「あおによし・・・」のように日本人の色感覚には数字では割りきれぬ奥深い感性が存在する事を。

桜を見たい多くの外国人を案内したが、太陽の光が弱い北海付近で生活する多くのヨーロッパ人には染井吉野の桜は白に写り、八重桜でないピンクに写らない。太陽光線が違うとその民族の目も感性も違ってくると思った。ゴッホは日本の感性を

求めてオランダから光豊かな南仏に移り住んだが、私はゴッホの絵に向かう時、ゴッホの目に染井吉野桜が白と写っていた時の作品か、それともピンクに見えるようになってからの作品か、何時もまず考えてしまう。この問題を北ヨーロッパ向けカラーテレビ技術者が良く理解して下さり、何人かは美術館に来てくれるようになった。又桜が描かれた日本画を千葉市美術館で魅た北ヨーロッパのお客様が日本人の色彩感覚の違いを感じとられた。

どんなに正確に翻訳しようとしても伝わらない事を優れた美術品は簡単に伝えてくれる。そう、美術館は日本をより深く理解し愛する外国人を増やす素晴らしい大使館であり、大自然の前に自分の限界と戦う技術者に素晴らしいヒントを与えてくれる貴重な場所なのだ!

日本の為に公立美術館や博物館の入館料無料化を願う。

千葉市美術館ボランティア 坂本眞里子



義経展での鑑賞リーダー

画人たちと千葉

海に抱かれ、穏やかな気候と豊かな緑に恵まれた千葉(房総)の地は、東京から比較的近いこともあって、多くの画人が旅をし、描いたことで知られています。またこの地に生まれ、あるいは移り住んで人生の幾ばくかの時を過ごした画人も少なくありません。

日本画家石井林響(本名毅三郎・1884-1930)は、千葉県山武郡土気本郷町下大和田村(現在の千葉市緑区下大和田町)に生まれました。生家は広大な農地に囲まれ、裏手には昼なお暗い雑木林が広がっていたといえます。旧制千葉中学校で堀江正章に学び、16歳の頃上京、橋本雅邦に師事しました。二葉会や官展などで入選・受賞を重ね、「西の関雪、東の林響」とまで評されますが、次第に浦上玉堂や石涛の跡を慕うようになり、南画に傾いてゆきます。頑固一徹な性格も手伝ってか画壇を離れ、1926年、生家に近い大網白里の宮谷(みやざく)に画房を建てて移りました。そして心身ともに文人画を描くにふさわしい境地を得たのも束の間、45歳という若さで没しました。林響の作品のほとんどは東京で制作されたこととなりますが、林の中(1922年)や 野趣二題 (1927年)といった代表作がそうであるように、その多くが人為の及ばない、ありのままの自然を描いています。林響という号の由来についても諸説あるなかに、長じた彼が生家を訪れた時、裏の林を吹き抜ける風の音を聞いて着想したというものがあります。生まれ育ち、再び帰ることを願った土地の風景は常に彼の脳裡にあり、懐かしい林の枝葉がふれあう音はいつも、通奏低音のように彼の耳に響いていたのでしょう。

山形県米沢に生まれ、1914年に上京した油彩画家椿貞雄(1896-1957)の場合、千葉とのゆかりは1926年に船橋尋常高等小学校の図画教員となったことに始まります。翌年には船橋町九日市に住まいを移し、後半生をこの地に過ごしました。椿と言えば岸田劉生との交流が有名ですが、彼は弟子たちのなかで最も師風に忠実な人でした。ゆえにその画業は劉生への没入と、劉生からの離脱の試みの連続であったと言えるでしょう。船橋に移り住んでまもない1929年に劉生が急逝し、椿は長い間虚無から抜けだせませんでした。窓外に田圃がどこまでも続き、庭には四季の花が咲く船橋のアトリエで周囲の自然に慰められながら、自身の造形を模索していったのです。1930年代以降に



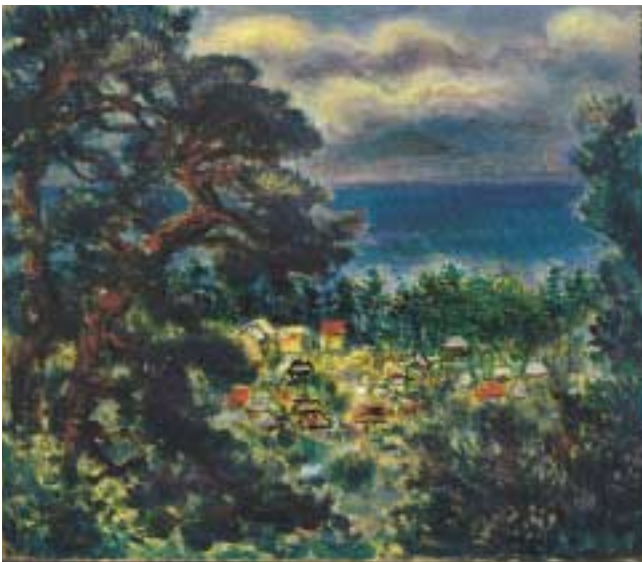
石井林響「月下群牛図」絹本着色一幅 大正(1912-26年)後期

生みだされた誠実でナイーブな静物画や風景画は、日本人による油絵のひとつの可能性を示しています。また晩年の重要なモチーフとなった愛らしい孫たちの肖像も、やはり船橋で描かれたものです。

日本画家小野具定(1914-2000)は山口県熊毛郡田布施村に生まれ、1931年上京、戦後まもなく野田町清水村(現野田市清水)に移り住みました(1974年柏市亀甲台に転居)。野田中学で美術を教えながら本格的に制作を始め、画題を求めて九十九里浜や外房をさまようなかで、うち捨てられた漁村という生涯のテーマを見出します。その後取材対象は東北や北陸、山陰や北海道にまで広がりますが、廃船や廃屋、海風にさらされる漁民たちを繰り返し描くうちに造形は熟し、黒々とした鋭利な描線が交錯する独自の作風を確立しました。胡粉の層と黒い顔料の層を重ね、固めては削ることで得られる堅固でかさついた画肌は、主題の重さをよく伝えて観るものを圧倒します。

画人たちは常に、風土や風景との対話を繰り返しながらその画業を形作ってゆくものです。本展では以上の三人のほか、松戸に生まれた夭折の画家板倉鼎や幼少期を銚子に過ごした銅版画家浜口陽三、八千代で晩年を迎えた木版画家星襄一など、十数人の画人による作品約75点を、さまざまなエピソードとともにご覧いただけます。彼らの対話の時に優しく、時にきびしい調子に耳を傾けていただければ幸いです。

学芸員 西山純子



椿貞雄「風景」油彩、カンヴァス 1952年

画人たちと千葉

2005年(平成17)7月9日(土) - 2005年(平成17)8月28日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】毎週月曜日

* 7月18日(月・祝)は開館、7月19日(火)休館

【入館料】一 般 200(160)円

高・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

* 「プラティスラヴァ世界絵本原画展～広がる絵本世界」の入場券をお持ちの方は無料です。

写楽・歌麿と黄金期の浮世絵

9月3日(土)-10月16日(日)

天明・寛政期(1781-1801)は、浮世絵の黄金期ともいわれてきました。鳥居清長、東洲斎写楽、喜多川歌麿といった優れた浮世絵師たちが活躍し、華やかで豊かな表現が展開されます。この時期の浮世絵の全貌と魅力をお楽しみいただけます。



喜多川歌麿「納涼美人図」寛政(1789-1801)中期

青木コレクションによる 幕末明治の浮世絵

9月3日(土)-10月16日(日)

浮世絵は常に身近な風俗を題材として発展してきました。江戸から明治という時代の変わり目に、浮世絵はどのように題材を選び表現してきたのでしょうか。日本橋魚河岸の魚商が、その当時に集めたというコレクションは、時代の息吹を伝えてくれます。



昇斎一景「元昌平坂聖堂に於て博覧会図」明治5年(1872)

写楽・歌麿と黄金期の浮世絵

青木コレクションによる 幕末明治の浮世絵

2005年(平成17)9月3日(土) - 2005年(平成17)10月16日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】毎週月曜日

* 9月19日(月・祝)は開館、9月20日(火)休館

* 10月10日(月・祝)は開館、10月11日(火)休館

【入館料】一 般 200(160)円

高・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

千葉市美術館開館10周年記念

ミラノ展・都市の芸術と歴史

10月25日(火)-12月4日(日)

ミラノは紀元前4世紀からの歴史を有し、街並には中世の名残を残しながらも最新流行ファッションを発信するという古い歴史と最先端の現在とが同居する魅力的な街です。そのようなミラノにはブレラ美術館をはじめスフォルツァ城市立博物館、ポルディ・ペッツォーリ美術館など多くの美術館・博物館が存在します。

今回の展覧会は、ミラノ市の全面協力を得て同市に所在する美術館・博物館15館からの出品作品により、ミラノの歴史・文化・芸術の魅力を伝えようとするものです。出品作品はローマ帝国時代の作品から、レオナルド・ダ・ヴィンチ、プラマンティーノ、フォッパなどのルネサンスの名画、モランディ、セガンティーニ、ポッチョーニといった近現代美術まで幅広く含みます。

本企画は、ミラノで過去に開催された北斎展や浮世絵展への千葉市美術館の協力に対する返礼として企画されました。



ロレンツォ・ロット「若者の肖像」スフォルツァ城市立博物館 絵画館蔵



レオナルド・ダ・ヴィンチ「レダの頭部」15世紀 スフォルツァ城市立博物館 素描室蔵

展示室で考える

照明

ガラスの次は、照明について考えてみましょう。照明を考えるうえで最も基本的なことは、照明は多かれ少なかれ作品を劣化させる、つまり損傷させるということです。しかし光がなければ作品を見ることはできません。したがって、そのバランスが最も重要になります。陶磁器とか金属のように、強い光を当ててもほとんど問題のないものもありますが、多くの作品は当てる光(その強さを照度といい、単位としてルクスを用います)が弱ければ弱いほど劣化は少なくなります。簡単に言うと、2倍の強さの光を当てると2倍劣化し、2倍長く光を当てると2倍劣化します。つまり、劣化は光の強さと時間に比例します。

劣化でもっとも重要なのは退色です。特に、日本の絵画や版画、染織品などは光に弱いのです。現在の日本では、日本絵画の場合、100～120ルクス、浮世絵版画の場合、50～100ルクスの照明を当てるのが普通です。照度が低ければ低いほど作品にはやさしい、ということになりますが、低すぎた場合、作品を十分に鑑賞できない、色が何だかすんで見える、つまりは作品の良さを味わうことができないということになります。そこまで低くすると、誰のために何のために展示したのかということになるでしょう。照度を高めた場合でも、当てる時間(展示期間)を短くすれば劣化は同じになるので、展示期間を短くすることも重要な選択肢になります。今日の日本では、企画展をいくつかの美術館に巡回させることが盛んに行われていますが、作品にとってみれば、ありがたくない現象といえるかもしれません。

照明については、照度の問題以外にも考えなければいけないことがたくさんあります。どのように当てるか、色温度のバランスはどうするかということも重要です。どのように当てるかということでは、彫刻のような立体は特に考慮が必要です。照明の当て方で、見え方が大きく異なるか

らです。現在の日本では、1点1点注意深く吟味しながら当てているとはとても言えない美術館が大半であろうと思います。それを可能にするには、熟練した技術者はもとより、相当な設備と十分な時間が必要だからです。大小の器具や小道具を駆使した照明の中に、すぐれた作品が魅力的に浮かび上がるさまを皆さんも想像してみてください。それは展示のひとつの理想的な形であろうと思います。

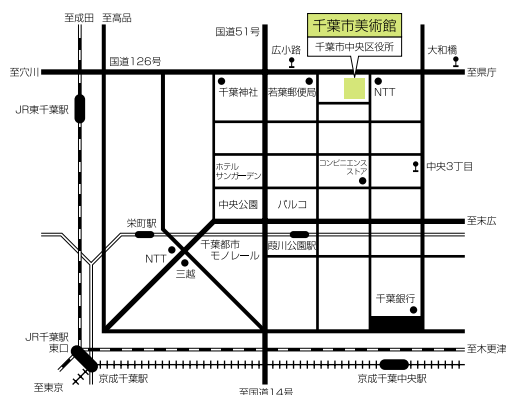
絵画などの平面の作品に当てる照明も、当て方によって、見え方が大きく変わります。十分な照度をとれない場合、均質な天井光は作品の印象を純化させるように思います。100ルクス前後であれば、スポット照明の方が格段に映えるように思います。作品にだけ当てるように工夫されたスポットであれば尚更良いかもしれません。

色温度というのは、赤っぽい光、青っぽい光、昼色光、白色光といったようなことなのですが、これについてはまたの機会ということにいたします。

つい先日の6月16日、17日に金沢市で全国美術館会議の総会が開催されたので、参加いたしました。昨年開館した金沢21世紀美術館は誰でもスーッと入りやすい美術館でした。ガラスを多く用いた開放的な空間が特徴的で、館内も展示室も非常に明るく、ざわめいていました。街中を歩いているようなその感覚は、ガラスと照明の明るさに多くを負っていると思います。そこをさんざんうろろうした後、すぐ近くに以前から建っている石川県立美術館に行きました。そこは全く別の空間で、21世紀美術館とは対照的に、照明は随分低く押さえられ、静かでひっそりとしていました。その印象の違いは建物の構造に起因するものが大きいのですが、照明の差によるところも大きかったことは確かです。

照明は、昔から、そして現在も、美術館にとって非常に重要かつ難しいもののひとつです。

(as)



JR千葉駅東口より徒歩約15分 / 千葉都市モノレール県庁前方面行「緑川公園駅」下車徒歩5分 / バスのりば より大学病院行、南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分 / JR千葉駅へは東京駅地下ホームから総武線快速千葉方面行で約42分
京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚ICで出て国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く
地下に駐車場有り



【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2005年7月1日

【印刷】株式会社プリンテックメディア